鬼殿さまの申し出！

ミルクプリン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
鬼殿さまの申し出！

【Ｎコード】
Ｎ７２４３Ｗ

【作者名】
ミルクプリン

【あらすじ】
突然、吸血鬼の世界に来てしまった風奈。
しかも、国の王と吸血鬼の学院「赤神学院」の生徒会長に選ばれて。
風奈の前に降りかかるピンチ。これからどうなる。
風奈と現代会長・国王の沙夜の関係は？
そして、哀歌の恋は？
吸血鬼百合ラブコメとなってます。
でも、一部男女の恋もあり。

第1話「赤神学院」

赤神学院、三階神王室。
今、次期生徒会長と国の王になる者の選抜会が行われていた。
生徒会長と国の王は全て選ばれた者だけが勤まる。
上段には選ばれた代表者が三人、そして、現在の会長――王でもある鬼殿沙夜がいた。
「以上で代表者三人の演説は終了した。どの代表者も赤神学院やこの国のトップになるのに相応しい存在よ。でも、トップになるのはただ一人。今、現生徒会長と王である私が、次期に相応しい人を決めたいと思う」
生徒みんなに向かって沙夜は熱く語った。
一斉にワーッという歓声が神王室に広がった。
「みんな静かに」
沙夜は鋭い目つきで、生徒たちを見回した。
赤い瞳に、見ていると何もかも見空かれてしまいそうな、独特の目だ。
その恐怖に恐れ入ったのか、生徒たちは遅れることなく全員同時に静まり返った。
「では、次期生徒会長、そして、次期国王になる者を選ぶことにする」
さっきまでの騒ぎは嘘だったかのように、緊張した空気が広がる。
「次期生徒会長、そして、国民をまとめる次の国王は――」
と、次の瞬間、沙夜の頭上に何かが光始めた。
丸い輪っかみたいなのが出来て、誰もがそれを見つめる。
「何だ、あれは」
代表者の一人である、閃光氷が口にした瞬間、その輪っかからものすごい速さで何かが降ってきた。
ドシンッという音と共に、生徒たちは騒ぎ混乱する。

「きゃー、何！　何が起こったの！」
「何だ今のは」
生徒が声をあげる中、沙夜の上には重たいものが覆いかぶさっていた。
あの輪っかから降ってきて、沙夜にぶつかってしまったのだろう。
その衝撃で、床に倒れこんでいる。
「すぅーっ、いたたたた。一体、何がどうなって――」
沙夜の上に被さっていた人物は体を起こした。
どこか痛めたのか、しきりに頭を気にしている。
「あっ。だ、大丈夫ですか？」
彼女は自分の近くで倒れている沙夜を見つけ、声をかけた。
「うっ、え、ええ。平気――よ」
倒れている体をお越し、声をかけてくれた人物を見た。
とても可愛らしい整った顔立ちで、傍にいると暖かさで包まれそうな感じが出ている。
そう、ずっと日光を浴びてきた、向日葵のような存在だ。
「良かった。安心した」
胸をおろし、一息ついた。
「会長！　大丈夫ですか？」
二人が座り込んでいると、代表者の一人――閃光氷が心配して駆けつけてきた。
沙夜と見知らぬ彼女は気が付いてないみたいだが、生徒や先生たちは驚いて、混乱している。
「ええ、大丈夫よ。ごめんなさい、式を中断してしまって」
「いえ、大丈夫ですけど、こちらの方は？」
沙夜と氷は未だ座り込んでいる彼女を見つめる。
そして、少しずつ落ち着いてきた生徒たちも、彼女を見つめた。
自分が注目されているのに気が付き、彼女は立ち上がった。
「あ、あの」
どうしていいか分からず、彼女は混乱していた。

さっきまで下校していたのに、見たこともない場所に来ている。
制服も違う、学校も違う、ただ同じなのは自分と同じ日本語で通じるということだ。
「もういいわ、彼女のことは後回しにしましょう。今は大事な式の途中。こっちを優先させるのが先決よ」
「はい、分かりました」
わけが分からないまま、彼女は他の生徒に壁際まで移動させられた。
神王室内はさっきの騒動で少しざわついているが、沙夜が演壇の前に着いたことで静まり返った。
「先程は突然の事故で中断してしまいましたが、これから再開したいと思います」
ゴクッと唾を飲みこむ人もいるだろう。
緊張の中、沙夜がいうのを待つ。
「次期生徒会長、国の王になる者は――彼女に決定します」
沙夜は手を彼女に向けた。
え？　何？
意味が分からず、キョロキョロする。
そこに、閃光氷が沙夜の元へ走った。
「どういうことですか！　会長！　選ばれるのは俺たち、代表者の中からのはずなのに。よりによって、名前も身元も分からないあの彼女だなんて」
氷は必至に沙夜へ話した。
「これは決まったこと。取り消すことなんてできないわ」
「そんな――くっ」
氷の表情は強張り、握りこぶしを強く作った。

同日午後。
神王室内で自己紹介した――冬月風奈は学校の隣にある寮へと向かっていた。

沙夜の言いつけで、風奈は赤神学院の生徒となり、次期生徒会長、そして次期国王と決まった。
そのため、風奈はまずこの学院で学んでもらうことにしたのだ。
「あ、あの、ここはどこなんですか？　それに、次期生徒会長とか何とかって分からないんですけど」
風奈の前には沙夜の側近である――笹井月都がいた。
彼は少しだけ手入れした髪の毛に、不良っぽい制服の着方をしている。
もっと手入れをすれば真面目そうに見えるが、これが彼のスタイルなのだろう。
そこは触れないようにしよう。
「ここは赤神学院。吸血鬼の生徒たちが通う共学の学校だ。まぁ、完璧な吸血鬼になるためにみんな学びに来てるって感じかな」
吸血鬼？　赤神学院？
風奈は理解できず混乱していた。
どれも信じられないことばかりで、仕方ないだろう。
でも、これが事実なのだ。
吸血鬼や学校のことは端に置くことにして、他の事を聞いてみた。
「何となく分かりました。それで、もう一つのことは？」
「次期生徒会長、次期国王のことだな。それは前から決まっていて、生徒会長とこの国を治める国王になることが定められている。その者になるのは、現代の会長が決めるんだ。それを決める時期は今頃、二年ぐらい経ってからかな。そんで、お前が来た時、ちょうど決めていたところだったというわけ」
「ん？　つまり、あの時私がその生徒会長と国王に選ばれたってことですか？」
「そういうことになる」
なんてことだろう。
国王と生徒会長に選ばれるなんて。
生徒会長なら何とかなるかもしれないけど、国王となると、難しい。

まだこの学校や外のことも知らないし、それに、吸血鬼とかわけが分からな過ぎる。
ここはまず、吸血鬼ではない人と話をしないと。
「吸血鬼ってことは、月都さんも吸血鬼なんですよね？」
月都は表情を変えず返事した。
「あぁ、そうだよ」
「ということは、歯に牙が？」
「あるよ。でも、これは仕事や授業の時しか使ってはいけないんだ。みんなその時に血を吸いお腹を満たしている。もし、授業や仕事以外でお腹が減ったら吸血パックというのがあるから、その心配は大丈夫だ」
風奈はますます分からなくなっていた。
「とりあえず頭の隅に入れておきます。あともう一つ、人間はいるんですか？」
全校生徒が吸血鬼となると、外には一人か二人ぐらい私と同じ人間がいるだろう。
いなかったら、吸血鬼だけの世界となる。
月都は驚いた表情で、答えた。
「お前、本当にこの世界のこと何も知らないんだな。人間なんてとっくの前に滅びただろ。滅びたより、俺たちが滅ばせたんだがな」
「それってどういうことですか？」
「俺たち昔の先祖が人を襲い、血を吸いまくったってことだ。あまりにも血を吸うから、人間たちは子供を産まなくなった。子供を産めば、また俺たちの餌ができてしまう。そんな悲しいことを子供たちにさせられないと思って、次々に人は子孫を残さず滅んでいったってことだ」
そんな悲しいことがあったなんて。
とても信じられない。
「えっ、ちょっと待ってください。それってつまり、人間は今この世にいないってことに――」

「前からそういってるだろ。おかしな奴だな。お前も吸血鬼なんだから、それくらい知ってるのが普通だろ」
私が吸血鬼？
まさか、みんな私のことを吸血鬼だと思っているのだろうか。
もし、そうだったら私はこれからどうやって過ごせばいいの？
よく分からない。
風奈は思いつめたまま、歩いた。
「よし着いたぞ」
風奈と月都の前に、大きな寮が立っていた。
これからここで生活することになる。
一刻も早く自分の世界に戻る方法を調べないと。
そう思いながら、寮の入り口に入ろうと進むと、声をかけられた。
「あともう一つ言い忘れた。吸血鬼同士キスをしてはならない」
「どうしてですか？」
「吸血鬼は皆、口元付近まで顔を近づけると、血を吸いたくなってしまうんだ。掟で、吸血鬼同士の吸い合いは異常行動が出たりするから禁止とされている。まっ、キスできなくても、恋愛はできるから気にするな」
「それじゃ」
そう言い残すと、月都は行ってしまった。
寮前に取り残された風奈は、頭の中で整理しながら夜の星空を眺めた。

寮に入り、管理人に挨拶を済ませ、自分の部屋へと向かった。
廊下を歩き、いくつもの部屋番号が書かれたドアの前を通り過ぎていく。
そして、目的の二〇五号室へと着いた。
「ここが私の部屋」
軽く深呼吸をし、気持ちを落ち着かせる。

管理人から聞いたところ、寮は個室ではなく相部屋らしい。
つまり、もう一人誰かと一緒に生活することになる。
――コンコン。
ノックをし、ドアを開ける。
「失礼します」
そっとドアを開けると、既に相部屋の人が中で待っていた。
「あ、来た。初めまして、九宮哀歌といいます」
「は、初めまして、冬月風奈です」
見た感じ、おっとりしていて優しそうな子だ。
少し痩せ過ぎのような感じもするが、具合も悪くなさそうだし大丈夫だろう。
ベッドに荷物を置き、そこへ座る。
「ええと、何から話せばいいのかな？」
普通の転校生なら教室とかで挨拶してみんなと対面するのだが、風奈の場合全てが違う。
突然、沙夜の頭上から降ってきたので、転校生とわけが違う。
「う～ん、この学校のことは聞いた？」
「うん、それはさっき月都さんから聞いたよ」
「月都さん――」
ふっと、哀歌は遠くを見るような感じになった。
「月都さんがどうかした？」
「あっ、ううん、何でもないよ。それより、まだこの寮の説明は聞いてないでしょう？」
「あ、そうなんだよね。よかったら教えてくれるかな？」
「喜んで。この寮は赤神生徒が使っていて、男子寮と女子寮に分かれているの。それで、三階に浴場やマッサージルーム、卓球やゲームで遊べる部屋があって、二階には生徒が使う部屋があるの。一階は食堂、売店、受付けって感じかな。あ。あと、四階に屋上があるんだけど、そこは立ち入り禁止だから入っちゃダメだよ」
屋上が立ち入り禁止。

それはどこの学校も寮も一緒なんだな。
その一つだけでも一緒なのがあると、少し安心する。
「分かった、教えてくれてありがとう」
「どういたしまして。それじゃ、そろそろ就寝時間だし寝ようか」
「うん、おやすみ」
「おやすみ」
荷物の整理もついたので、風奈と哀歌はベットに横になった。
夕食は月都と一緒に学校の食堂で食べたので心配ない。
だが、お風呂はまだだ。
これから入りに行くのもいいが、一人で、しかもまだこの寮に慣れてないので行きづらい。
明日の朝、哀歌と一緒に行こう。
そう決め、風奈は夢の中へと入っていった。

第2話「吸血鬼の世界一日目」

翌日早朝、沙夜はある場所にいた。
そこは生徒会長室で、主に生徒会長だけが使うのを許される部屋だ。
時刻は午前七時半、まだ生徒は登校するのに早い時間である。
でもそこで沙夜は、一枚の紙を見つめていた。
「冬月風奈――」
見ているのは、昨日風奈に書いてもらった入学届だ。住所や学歴、特徴、健康状態などが書いてある。
沙夜は風奈が書いた一文字一文字をじっくりと読んだ。
すると、ドアをノックされ、月都が入ってきた。
「失礼します。会長、今日は早いですね。何かあったんですか？」
「ちょっと気になることがあって」
「ん？　あぁ、昨日降ってきた彼女のことですね。大丈夫ですよ、俺が昨日ちゃんと寮まで送りましたから」
月都は眠そうに、軽い欠伸をした。
「そうじゃないの。彼女の住所はどこなんだろうって思って」
「住所？」
沙夜が考えていたことが違うことに、月都は気になり、沙夜の近くへ移動した。
「鷹峰市――月都、どこだか分かる？」
「いや、聞いたことないです」
「そうよね。ここは赤神国、市とかは使わないわ。他の国でも聞いたことないし――。それに、あの時どうして私の頭上から降ってきたのか」
難しそうな顔で考える沙夜。
ものすごく風奈のことが気になるようだ。
「会長、ここで考えるより、直接本人に聞いたほうが早いと思いますよ？」

「それもそうね」
さっきまで睨むように見ていた書類は机の中にしまい、カバンを手にした。
「月都、そろそろ教室に戻るわよ。授業が始まるわ」
「はい」

お昼休み。
風奈は自分の教室の隅にいた。
周りにはたくさんの生徒たちが風奈を囲い、質問攻めをしている。
「ねぇ、どうして沙夜さまの頭上から降ってきたの？」
「もしかして異世界から来たとか？　そんなことないよな」
「代表者でもないのに、沙夜さまはどうしてあなたを選んだのかしら？　理由を知ってる？」
次々と降りかかってくる質問に、風奈は困っていた。
実は転校生ということで、このクラスに来て自己紹介をしたのだが、みんな聞きたいことがたくさんあるらしい。
それもそうであろう、なにせ、国王とか会長とかに選ばれて、しかも沙夜の頭上から降ってきたのだから。
答えたいけど、風奈も理由が分からないので答えられないでいる。
「みんな、落ち着いて。風奈が困ってるよ」
助けの声をかけてくれたのは、嬉しいことに、相部屋の哀歌だった。
哀歌は同じクラスなので、風奈にとって心強い存在だ。
「ありがとう、哀歌」
哀歌とはもう名前で呼び合える仲になった。
昨日、寮へ来たばかりで早いと思うが、今日の朝、哀歌から名前で呼んでもいいという許可をもらったのだ。
許可をもらうことはないものだが、友達ができて、風奈は喜んでいる。
哀歌のおかげで、周りにいた生徒たちは申し訳なさそうに離れてい

く。
これからこんな感じなのかなと思うと、参ってしまいそうだ。
でも、哀歌がいれば、どんな困難も乗り越えていける。
そう思った。
「風奈、昼食はまだでしょ？　一緒に食堂で食べよう」
「うん」
お昼はみんな、寮でお弁当を作って持ってくるか、学校の食堂で食べるかのどちらかだ。
寮でお弁当を作ってくれれば良かったが、恥ずかしいことに風奈は料理があまりできない。
そのため、学校の食堂で食べるしかないのだ。
教室から出て食堂へ向かう。
「あ、でも、お金持ってないよ」
「大丈夫、私がおごってあげるから」
「ほんと？　やった」
軽く喜んだ。
「その代り、後でお金返してね」
悪魔のように微笑むと、風奈は苦笑いをしながら承諾した。

食堂につくと、二人は食べたい物を選び、空いてる席へと座った。
この学校はバイキング形式のようで、自由に食べたい物を選ぶことができる。
風奈は、いつもと同じ、和食だ。特に卵焼きが大好物で、毎日欠かさず食べている。
だが、一つ問題が目の前にあった。
それは。
「ね、ねぇ、一つ聞いていいかな？」
「何？」
「哀歌の前にある、それ――」

風奈が見てるその先には、スープ専用の入れ物に、赤い色をしたものが入っていた。
見た感じ、ドロドロっとしている。
「これ、レッドスープっていうの。おいしいよ？」
「うっ――」
レッドスープ――
完全に血にしか見えない。
「そのスープって血だよね？」
「何言ってるの、当たり前だよ。もしかして風奈、これ嫌い？」
「いや、嫌いってわけじゃないけど――」
本当は嫌いといいたいが、早速できた友達と居心地悪くなるのが嫌で嘘をついた。
これ以上、いろいろ聞いてもどれも信じられないので、風奈は目の前にある物をもくもくと食べ始めた。
すると、しばらくして風奈は誰かに見られている気配を感じた。
風奈の周りには、同じように食事をしている生徒や、談話をしている生徒、料理を作ってるシェフの姿しか見えない。
気のせいか。
そう思い、前を向くと、一人の生徒が近づいてきた。
「あなた、この前沙夜さまに選ばれた人ですよね？」
どこかイライラしてる雰囲気も感じられる言い方だ。
「た、たぶんそうだと思いますけど――」
「くっ。あの時、あなたが来なければ、兄上が勝っていたかもしれないのに」
「兄上？　誰のことですか？」
「もういい！　転校生だか何だか知らないけど、忠告しておくわ。あまりはしゃいで調子に乗らないように！　分かった？！」
そう言い残すと、去って行った。
風奈は意味が分からず、去って行った彼女の後ろ姿を見つめる。
「えっと、どういうことかな？」

とりあえず、嵐は去ったので、さっきのことを哀歌に聞いた。
「今の人は、閃光氷さんの妹さん。小さい頃から氷さんにずっとくっ付いて、離れない、お兄さん好きだとか聞いたことあるけど、実は私も良く知らないの」
「そうなんだ」
風奈は哀歌の容器にあるレッドスープを見つめたまま、考え事を始めた。

昼食を終えた風奈と哀歌は食堂を出た。
時刻は十三時半。
まだ午後の授業が始まるまで三十分もある。
これからどうしようかと悩んでいると、また誰かが近寄ってきた。
「あの、この前沙夜さまに選ばれた人ですよね？」
「はい、そうですけど」
「いた！　おーい、ここにいるぞー」
突然、男子が大声で叫び始めた。
その同時に、廊下が騒がしくなり、バタバタと走る音が聞こえてくる。
「えっ、えっ」
あたふたと困ってる間、既にあっちからこっちからと生徒が走ってきた。
「捕まえろ―」
「サインください」
「沙夜さまとどんな関係を？」
大体三十人ぐらいだろうか。
スピードを緩めることなく走ってくるので、風奈は反射的に逃げた。
「待ってください！」
待てといわれるが、そうもできない。
風奈は風のようにサッと走り続ける。

右に曲がっては進み、そして、階段を下りて上がっての繰り返し。
たまに待ち伏せをされることもあるが、そこを何とかして通り抜け、走る。
大分息も切れ始め、風奈は階段を上った。
上がった時『立ち入り禁止』と書かれた看板が立ってあったような気もしたが、今は緊急事態なので気にしない。
階段を上っていくと、一つのドアがあった。
「もしかして屋上？」
立ち入り禁止の看板、そして、複数の窓がありそこから外が見える。
屋上は哀歌に行ってはダメと言われた。
だが、今はピンチの時。
風奈は迷うことなく、ドアを開けた。
すると鍵もかかっていなく、簡単に開いた。
「涼しい」
さっきまで走りっぱなしで、汗だくだったので、風が心地よく感じる。
気持ちよさそうに風を受けていると、微かに追いかけてきた生徒たちの声が聞こえた。
「ここもやばいかな」
次の場所に行こうかと悩んでいると、とっさに、後ろから抱きしめられ引きずられた。
「えっ、ちょっと」
風奈のお腹に手を回して、離さないように抱きしめている。
感覚からすると、風奈より背が小さい。
手も少し子供っぽく、それでも、高校生並みの強さで抑えている。
これは女の子だろうか。
「危ないところだったわね」
突然、話始めたので、風奈は手を振りほどいた。
「えっと、助けてくれてありがとうございました」
「気にすることなんてないわ。元はといえば、私があなたを指した

のが原因なんだし」
黄色いツインテール、大きくて赤い瞳、そして、小柄な体格。
とても綺麗で、どこかのお嬢様といいたいところだ。
「私を指した――それってつまり、あなたが」
「ええ、現生徒会長の鬼殿沙夜よ。よろしくね、冬月風奈さん」
沙夜は微笑み、手を差し出した。
「こちらこそ」
風奈は差し出された手を軽く握り、握手をした。
「さっきは危ない所だったわね。あのままでいたら、見つかっていたところよ」
「はい、本当に危機一髪でした」
沙夜は風奈を見る。
頭から足のつま先まで、何か不思議なものを見るような目だ。
どこかおかしいのか。
制服もきちんと着ているし、哀歌から聞いた校則違反もしてないはず。
風奈も気になる感じで、聞いてみる。
「あの、どこかおかしいところありますか？」
「あ、ごめんなさい。ただちょっと気になることがあって」
「気になること？」
何だろう。
とても気になる。
「気になることがあるなら、何でも言ってください。私は大丈夫ですから」
そういっても、沙夜は言いづらそうな表情をしている。
何をためらっているのか。
「沙夜さん、もしかしたら私の為になることかもしれないので、遠慮なくどうぞ」
「それもそうね――。まず、私たちの呼び方を変えたいんだけど」
「いいですよ。えっと、沙夜さんのことは何て呼べば――」

ニコッと微笑み
「呼び捨てでいいわ。私があなたを選んだわけだし、これからもっと関わることになるから」
といった。
「分かりました。じゃあ、私のことも呼び捨てで」
「ええ」
その一瞬、風が吹いた。
秋の風だろうか、とても心地よい爽やかなものだ。
お互い髪の毛とスカートを抑えた。
そして、風が通り過ぎると、沙夜は真面目な顔になった。
「それで風奈、気になることだけど」
「はい」
「――あなた、人と会ったことある？」
人。
それはつまり、人間だ。
人といえば、この中で風奈しかいない。
この世界から見ても、風奈だけだろう。
「人ですか？　えーと、ないです」
「そう。変なことを聞いてしまってごめんなさいね。ないならそれでいいのよ」
どうして、人と出会ったことがあるのか聞いた意味が分からなかったが、風奈は自分のことをことを話せない、いや、話したら何か怖いことでもありそうな気配を感じたので情報を漏らすのをやめた。
それから二、三分してちょうど昼休み終了のチャイムが鳴った。

第3話「事実と確認」

放課後。
風奈は図書室にいた。
ここで勉強するのはうってつけの場所だが、目的が違う。
今日は、ここで赤神学院のことや、国のことなど細かいことを知ろうとやってきたのだ。
「禁止事項――吸血鬼同士でキスをしてはいけない」
読み上げ、いろいろと知っていく。
他にも、吸血パックの使い方、昔起きた様々な事件が書かれていた。
室内には風奈、一人しかいない。
図書室の受付にも誰一人いなく、シーンとしている。
この学校のことを調べるには、最高の時だった。
「禁断症状？」
読んでいく中に気になることが書かれてあった。
禁断症状。
血が足りなくなった場合は吸血パックで補えることができる。だが、無い場合、パニックになりその場にいる近くの者を襲ったり、自分をコントロールできなくなる時もある。
また、血を吸われた者には、激痛が走ることがあると書かれてあった。
「何これ――こんな怖いことがあるなんて」
ただ書かれた文字を見て、青ざめていった。
吸血鬼の恐ろしさ、そして、これが事実ということ。
最初は受け入れられなかったが、本を読んで、少しずつ風奈の状況が変わってきていた。
そして、もう一つ重要なことが書かれていた。
「解析繁殖実験――」
ここ赤神国にて、吸血以外の人物、つまり餌となる人間が現れた時

その者は解析繁殖実験を行うことになる。
餌となる人間を捕らえ、繁殖させ、増えさせれば我々の食事に悩むことなく過ぎすことができる。
それが解析繁殖実験だ。
「ひどい――」
その一言しか出てこなかった。
心が苦しくなり、泣きたくなる事実だった。
風奈はそれ以上読むのが辛くなり、苦しさの中、静かに本を閉じた。

「今日はお疲れ様。初日の学校生活大変だったでしょ？」
明日の授業の確認をしていると、もう寝ようと準備していた哀歌がいってきた。
「大丈夫だったよ。でも、ちょっとみんなの反応が苦労したかな」
「うふふ、そうだよね。私も見た感じそうだと思った」
口元に手を当てて微笑んだ。
風奈も授業の確認は終わり、寝る準備へと入る。
寮の寝室は、敷布団ではなく、二段ベッドだ。
一番上は哀歌であり、下は風奈が使っている。
部屋の明かりを薄暗くし、自分のベッドへ足を入れた。
「これから大変だと思うけど、哀歌がいれば頑張れる。そんな気がしてきた」
「でも、私はあまり力になれないかもよ？」
「そんなことない、大丈夫だよ」
哀歌の声は自信がなさそうな、弱々しい感じだった。
「そう？　なら、よかった」
時刻は既に消灯時間を過ぎている。
明日も大変なので、風奈は寝ることにした。
「じゃあ、そろそろ。おやすみ」
「うん、おやすみ」

薄暗い光を消し、目を閉じた。

カチカチカチ。
微かに時計の音が聞こえる。
まだ朝ではないだろう。
風奈は少しずつ夢から意識が戻ってきていた。
辺りはシーンとしている。
目を閉じたまま、横になっていると、突然何かの気配を感じた。
何かが動いている。
そして、その気配はピタリと止まった。
何だろう？
本当は怖いので目を開けたくないけど、もし、命に関わることだったら危険なのでグっと開けた。
「あ、哀歌！？」
目を開けた先にいたのは、何と、哀歌であった。
まだパジャマのままで、風奈の横にいる。
「――すごく――いい匂い――」
寝ぼけているのか、目はうつろなままだ。
だんだんと風奈の顔に近づいたかと思いきや、首元へ向かってくる。
「ちょっと、哀歌！　しっかりして！」
風奈が叫んでも、哀歌は変わらず首元に集中している。
「――うふふ、いただきま――」
最後の、す、を言いかけようとした時、パシンと乾いた音が聞こえた。
「しっかりしなさい！！」
大きな声でいったのは、沙夜だった。
突然の登場に、風奈は驚いた。
いや、沙夜の登場より、彼女が手にしているものが一番の驚きだ。
沙夜の手には何故かハリセンを持っている。

「あ、あの――」
「風奈が無事でよかったわ。ちょうど寮の見回りをしていたら、誰かが叫んでいる声が聞こえたの」
沙夜は簡単に説明をした。
「すみません、こんな夜遅くに」
「気にしないで、これも生徒会長の仕事だから。それより――」
沙夜と風奈の下で、横になっている哀歌がいた。
ハリセンの効果なのだろうか。
気絶している。
「これは一体どういうことなの」
「それが私にも分からないんです。寝ていたら、突然哀歌が近づいてきて」
「突然？」
「はい」
何か気になることでもあるのか。
難しい顔をしている。
「風奈、ちょっと」
そういった瞬間、沙夜は風奈の首元に顔を近づけた。
微かな吐息が首元へかかり、少しくすぐったい。
胸の鼓動が何故だか、バクバクいっていた。
「――さ、や――」
「そういうことね」
もう、沙夜は風奈から離れ、一人で納得していた。
何がそういうことなのだろうか。
「え、何がそういうことなの？」
「風奈、もう遅いから続きは明日話しましょう。それに、この子もこのままでは悪いし」
そうだった。
話に夢中で、哀歌のことを忘れていた。
話も気になるが、今は哀歌を何とかしないと。

「分かった」
「では、おやすみなさい」
風奈の部屋を出て、誰もいない暗闇の廊下を進んだ。
途中、明かりが見えなくなり、窓から差し込む月明かりの中で沙夜はぽつりと呟いた。
「明日から忙しくなるわね――」

第４話「理解」

「おーい」
誰かに声をかけられたので、風奈は振り返った。
そこには、制服が乱れたままの月都がいた。
手に持っていたパンを膝の上に置き、話をする。
「月都さん。どうしたんですか？」
「あぁ、会長が呼んでたから、教えに来ただけだ」
会長、つまり沙夜である。
恐らく、昨日話があると言っていたのと関係があるのだろう。
「分かりました。それで、いつ頃行けば――」
「今日の夕方、確か四時半ぐらいだそうだ。それじゃ、用は済んだからな」
そういうと、月都はだらしげに去って行った。
その光景を、暗闇の中で見ている人影があった。

夕方四時、夕陽に染まった教室に風奈はいた。
外にはまだグラウンドで、サッカーなど、部活動をしている生徒が僅かにいる。
校内にも、文系部の生徒がいて、作業をしている。
そのとある一室で、風奈は沙夜が来るのを待っていた。
「遅いな」
ぽつり呟き、窓から外を眺める。
ぼんやりと今までのことを思い出してみた。
自分以外の人が吸血鬼だということ。
知らない世界に来たこと。
次期生徒会長と国王に選ばれているということ。
どれも、現実とは思えない内容だ。

だが、全てが事実。
風奈は遠い空を眺め、元いた世界のことを考えていた。
――ガラガラッ。
突然、教室のドアが開いた。
そこに立っていたのは、沙夜であり、風奈のほうを見つめている。
「ごめんなさい、遅くなってしまって。ちょっと生徒会のほうが長引いたの」
「あっ、大丈夫ですよ。私は今来たところなので」
慌てて振り返った。
「そう、ならちょうどいいわね。それで例の話なんだけど」
沙夜は開けっ放しのドアから廊下左右を確認し、そっと、閉めた。
まるで、誰もいないか確認するかのようだ。
そして、沙夜は風奈に近づいていく。
ゆっくり、少しずつ攻めていき、風奈を窓際に追い込んだ。
「えっと、あの」
「例の話の件だけど、あなた――」
ゴクリ、唾を飲みこんだ。
「人間よね」
その一瞬、静まり返り、お互い身動きをしなかった。
「や、ち、違いますよ。急に何を言うんですか」
「違うのなら、どうしてそんなに動揺しているのかしら」
確かにそうだ。
風奈は図星をくらい、隠すことができない状況にいた。
「えっと、それは」
「吸血鬼というのなら、歯を見せなさい。本当に人間じゃなかったら、前歯の両脇に牙が生えているはずよ」
見せるべきなのか。
それとも、見せないべきなのか。
とてもピンチの状態だ。
「うっ、も、もし、私が人間だったらどうするんですか？」

「どうもしないわ。ただ納得して、これからのことを考えるだけよ」
「本当ですか？」
風奈は少し前に進んだ。
「ええ」
「分かりました。沙夜のことを信じます」
この道、隠しながら生活するのは辛いと思っていた。
いずれかは、バレることなのだから、はっきりさせておいたほうがいい。
迷うことなく、風奈は沙夜に口を見せた。
「これではっきりしましたよね」
「ええ――」
とても暗い返事だった。
やはり、人間だということがいけないことなのだろうか。
「ごめんなさい、私、迷惑なんですよね。これからの学校生活も考えないといけないし、このまま沙夜に頼ってばかりになってしまうこともある。それに、人間は吸血鬼の餌だからいずれかは私を使って『解析繁栄実験』を行うことにもなる。こんなに迷惑をかけるんだったら私――」
続きをいおうとした瞬間、沙夜は風奈を抱きしめた。
隙間を作ることなく、ピッタリと。
「何を言ってるのよ。誰が風奈を迷惑だって言った？　誰も言ってないでしょ。それに、私はあなたのことを守りたいの。それだけは分かってほしいわ」
「沙夜――」
暖かい沙夜から感じられる温もり、そして、優しい言葉をかけられ風奈は涙をこぼした。
今までの不安や苦しみ、そして、実験台になる恐怖からその涙は出て、今、沙夜は風奈の立場を理解した。

第5話「味方」

風奈が人間だと沙夜にバレてから一夜が経った。
もしかしたら、実験施設に送られるかもしれないと思っていたが、そうでもなく沙夜は受け止めてくれた。
だが、みんなに気づかれたら、恐らく送られてしまうだろう。
そうならないように、沙夜はいくつかの守りごとを話した。
一つは、あまり接近しないこと。
と、いっても、顔と顔ギリギリまでに近づいたり、抱き合ったりしなければ大丈夫そうだ。
二つ目は、歯を見せないこと。
吸血鬼にとって証である尖った歯は命と同様大切なものだ。
これがないと分かると、人間だということがバレてしまう。
そうならないように、気を付けなければならない。
そして、本日。
風奈の授業の中で、『狩り』というものがある。
これは、名前の通り、狩りをするものだ。
狩りといっても、槍や何かの武器を使って獲物を捕らえるのではなく、牙を使い獲物（動物）の血を吸うのだ。
簡単にいえば、餌を食べにいくといってもいいだろう。
いわゆる、食事会みたいなものだ。
その授業があるため、風奈は欠席することにした。
「三時間目終了。風奈、次は狩りの時間だよ。一緒に行こう」
二時間目の授業が終わり、席で、休む理由を考えてると哀歌が寄ってきた。
「あ、ごめん。ちょっと体調悪くて」
「え、大丈夫？　一緒に保健室行こうか？」
「ううん、平気。気にしないで」
「そっか、分かった。じゃあ、先生に伝えておくね」

「うん、ありがとう」
何とか話し終えると、哀歌は去っていった。
とりあえず、休むことに成功した。
保健室の先生に会うのは初めてだ。
どんな人なんだろう？
そんなことを考えながら、教室を出た。

保健室に着くと、何ともいえない薬品の臭いがした。
これは消毒液の臭いか。
「あれ、先生がいない。どこに行ったんだろう？」
運悪く先生がいなかった。
風奈が人間だとバレることにとっては、いないほうが好都合なのかもしれないが、このまま勝ってにベッドを使っていいのか分からない。
でも、いないのならば、仕方ないので使うことにした。
ベッドは奥から三つある。
風奈はその中の廊下側のベッドに、腰かけ、横になった。
「いつまで、休みが通用するかな。ちょっと心配」
小さく呟き、ゆったりゆったり、風奈は目を閉じた。
「――風奈――」
誰かが名前を呼んでいる。
とても優しい聞いたことのある声だ。
「風奈」
また呼ばれると、風奈は目を開けその人物を捉えた。
「沙夜」
風奈の目の前にいたのは沙夜であった。
しかも、ベッドの上で、沙夜が上に乗っかってる。
「どうしたんですか、こんな所で。しかも、べっ」
続きをいおうとすると、沙夜は人差し指を風奈の口元にそっと置い

た。
「風奈のことが気になって」
甘い声で囁く。
「だ、大丈夫ですよ。心配しないでください」
「でも、気になるの――」
だんだんと風奈の首元に近づいていく。
「あ、あの――っ」
顔中真っ赤で、身動きが取れない。
「風奈の血って、一度でいいから飲んでみたいの――きっと濃い赤い色で、口の中でとろけるように混ざり合って私を満たしてくれる。そんな味」
こんな展開前にも合った気がする。
火照った体、そして、首元でかかってる吐息。
現実とは違う感覚に、風奈は目を覚ました。
「こんなの違う！」
ガバッと上半身を起こした。
「ハァハァ」
息が乱れ、さっきのは夢だったと気が付く。
風奈の上にはもちろん沙夜はいない。
だが、横に哀歌がいた。
「何が違うの？」
哀歌と目が合い、誤魔化す。
「い、いや、何でもないよ。ごめん、ちょっと変な夢見ちゃって」
「そっか、さっきうなされてたから大丈夫かなって心配してたんだけど、大丈夫そうでよかった」
「ありがとう、心配してくれて」
ニコッと哀歌は微笑んだ。
「それで、哀歌はどうしてここに？」
「あ、次の授業出られるか聞きにきたの。どう？　出れそう？」
心配そうな瞳で、風奈を見ている。

「うん、もう大丈夫だよ。次の授業は吸血鬼の細胞の話だよね」
「そう、する場所は教室じゃなくて、移動教室だから哀歌の分のノート持ってくるね」
哀歌はそういって、行ってしまった。
一人残され、風奈は気持ちを落ち着かせた。
あまりにもリアルで、変な夢だったから、どうにも鼓動が抑えきれない。
思い出すだけでも、風奈は顔中真っ赤になった。

何とか午前中の授業が終わり、昼休み。
風奈は相変わらず、外のベンチで昼食を採っていた。
お金はどこから出てきてるのかというと、沙夜からである。
沙夜はお金がない風奈のために、食料費や学校の費用など入れてあげてるのだ。
そして、この時間風奈は一人である。
本当なら哀歌と一緒なはずなのだが、彼女は部活動で忙しいらしく一人で素早く食べて行ってしまう。
何とか風奈も彼女と一緒に食べるため、時間を同じに食べてみたが、完敗。
ものすごい早さで食べる彼女には勝てなかった。
「今日もいい天気」
のんびりと午後の時間をくつろいでいると、遠くのほうに沙夜がいた。
何やら、男子生徒と話をしているらしい。
その男子生徒は体育着を着ているので、部活動の練習か、午後の授業のためであろう。
「会長、最後まで頑張ってください。応援しています」
「ええ、ありがとう。全力で頑張るわ」
「か、会長、あの、サッカーボールを二つぐらい増やして欲しいん

ですけど」
「分かったわ、あとで生徒会のほうで話をするわね」
楽しそうに微笑む沙夜。
その姿を風奈はじっと見ていた。
どこまでも完璧な姿、みんなから尊敬され親しまれている沙夜。
何かが、チクリと風奈の胸に痛んだ。
「じゃあ、そろそろ行くわ」
くるりと向きを変え、沙夜は風奈の方向に向かって歩き出した。
そして、目と目が合い。
「風奈」
沙夜は声をかけた。
「ひぃっ。えっと、あの、こ、これで失礼します」
何故か風奈は逃げてしまった。
乙女のように風奈は去っていき、残された沙夜は曇った表情を見せた。

数日後、風奈にとって最悪な行事があった。
それは歯科検診である。
虫歯がないかチェックするための診断だが、それは風奈にとってあってほしくないものだった。
元いた世界なら悩む必要はないのだが、この世界ではわけが違う。
先生に歯を見せるということが待っていたのだ。
歯を見せる、つまり、牙がないことがバレてしまう。
もし、これで人間だとバレたら終わりだ。
「風奈にとって初めての検診だね」
「う、うん」
哀歌にいわれ、ぎこちない返事をした。
歯科検診は一人ずつ部屋の中に入り、診察するようだ。
今、風奈は保健室の外で待っている。

一人ずつ名前を呼ばれ、生徒たちが入っていくのを見ると、ちょっと憂鬱になりそうだ。
欠席することもできないし、このまま逃げることもできない。
ただ、ひたすら苦痛の時間を待った。
四人、三人、二人、そして――。
「冬月さん」
名前を呼ばれ、風奈は思いつめたまま保健室の中に入った。
保健室の中央に、くるりとカーテンで包まれて、微かに様々な器具が見える。
奥に進み、カーテンを少し開けると、先生がそこにいた。
暗い雰囲気のまま、顔を上げず用意された椅子に座る。
まるで、歯医者に行き、歯を治療するのが嫌な子供みたいな感じだ。
「――お願いします」
吐き捨てたセリフでお願いをした。
「おい。おい、聞いてるのか？」
どこからか声が聞こえた。
風奈はそのまま顔を上げ、先生を見る。
「よう、何やら顔色が悪いみたいだが、大丈夫か？」
そこにいたのは、月都だった。
沙夜の側近で、いつもだらしない恰好をしている人だ。
あまりの登場に、風奈は驚いた。
「つ、月都さん！？　どうしてここに」
「沙夜に頼まれてな。もしかしたら、歯科検診で疑われるかもしれないって言われて、俺が医師を任せられたんだ。まぁ、そういうのは本当はやっちゃいけないんだけど、沙夜は国王だから何でもできるんだ」
「そうだったんですか――ん？　ちょっと待ってください、ということは？」
気になることがあり、月都に聞いてみる。
「もちろん、お前が人間だってことは知ってる。全部沙夜から聞い

たからな」
「なるほど、なら安心しました」
「まぁ、沙夜はお前のこと本当に大事にしてるから、安心して俺たちに頼れよ。あまり一人で抱え込むな」
ポン、と肩に手を置かれ、月都は笑顔を見せた。

第6話「話合い」

夏からすっかり秋へと変わり、気温の変化が激しく見られた。
今まで青かった木の葉は、黄色に染まり始めている。
もう食欲の秋、読書の秋かと次々に落ちていく枯葉を見つめながら、
風奈はゆっくりとその姿を頭に刻んでいった。
「すっかり秋だね」
「そうだね、最近は朝が寒くなって、起きるのが辛いよ」
集中して、スケッチブックに描いている哀歌に話しかけた。
今は、二時間目。
美術の授業で、風奈たちは外の風景をスケッチブックに描いていた。
描く対象は何でもいいらしいが、せっかくなので外の風景を描くことにした。
「あ、哀歌上手だね。すごく綺麗だよ」
「そんなことないよ。それより、風奈も綺麗じゃない」
「いや、私は下手だよ。ほら」
哀歌はじっくりと風奈が描いた絵を見た。
木から落ちる葉っぱの瞬間を描いたのだろうか。
写真のようにその姿は捉えられていて、葉っぱの流れがとても美しい。
「ううん、哀歌のほうが上手だよ」
またもや否定をしたが、このままでは永遠と同じ会話をしなければなくなるので、哀歌は受け止めた。
「そう？　そういってもらえると嬉しい」
微笑むと、哀歌は木を見、描き続けた。
風奈も集中するため、会話は中断して、手を動かす。
静かに風が吹き、冷たい空気が痛く感じる。
震える、とまではいかないが、寒いくらいだ。
描きながら、風奈はあることを聞いてみた。

「そういえば、哀歌はどんな部活をしてるんだっけ？」
「――合唱部よ」
「合唱部か、一度でいいから哀歌の歌声聞いてみたいな」
その瞬間、哀歌の表情が曇った。
「――あ、後でね」
そっけなくそういうと、哀歌はまた手を動かし始めた。
何か変なことでも言ったであろうか。
よく分からなく、風奈は気にとめた。

放課後、風奈は生徒会室へと向かっていた。
またもや、休み時間に月都から伝言で言われたのだ。
沙夜が放課後に話したいことがあるから生徒会室へ行くように、と。
いつも思うが、沙夜の側近である月都は、こういう伝言をすることは大変なんじゃないのだろうか。
ふと、そう思ってしまう。
長い廊下を進み、三階へと続く階段を上っていく。
赤神学院はとても広いので、迷ってしまうくらいだ。
でも、何とか移動教室とかで、大体の場所は分かる。
「確かこの部屋でいいんだよね」
真っ赤に染まった大きい扉をノックした。
すると、中から返事が聞こえたので、おそるおそる入った。
「失礼します」
素早く中へ入ると、大きい机、そして社長が座りそうな豪華な椅子に沙夜は座っていた。
まるで、この学院の校長でもあるかのような光景だった。
「いらっしゃい、さぁ、こちらへどうぞ」
誘導されるがまま、赤いソファへと座る。
沙夜が紅茶を入れに向かったので、待っている間、生徒会室を見渡すことにした。

先代の生徒会長だろうか。
ずらりとそれらしき人物の肖像画が飾ってある。
男子だったり女子だったりと、生徒会長や国王とやらになるのは性別は関係ないらしい。
しばらく、生徒会室を見渡していると、カタッとテーブルの上に物音がしたので、前を向いた。
「肩ぐるしい部屋でごめんなさい。この部屋なら何でも話せるかと思って」
テーブルに紅茶を置き終わると、沙夜は風奈の真向かいに座った。
「いえ、大丈夫です。あの、それで大事な話って」
「そのことだけれど。風奈――」
「はい」
一体何を話すのであろう。
もしかしたら、人間と関わるのはもう嫌だとか。
いや、死刑とか？
悪いことばかり考えてしまい、風奈は沙夜の口が開くのを待った。
そして。
「次期生徒会長、そして、次期国王になる気はあるのかしら？」
そうか、その件か。
とりあえず、風奈は安心した。
「まだ風奈からその件について、返事を聞いてなかったから」
「そうだったんですか。次期生徒会長と次期国王――」
ふと、考える。
元々、風奈は生徒会長も国王もなる気はない。
生徒会長と国王になるということは、つまり、吸血鬼たちの王になるということだ。
そんなことを、人間である風奈はできるはずがないのが、常識であろう。
もし、なったとしても、国民が黙っていないだろう。
バレてなくても、続けるのは無理だ。

「――ごめんなさい、私にはできません」
暗い表情で風奈は断った。
「そう――」
ガッカリさせてしまった。
一息つくためか、沙夜は目の前のカップを手に取り、紅茶を飲んだ。
無言のどんよりとした空気が続き、どうも居心地が悪い。
何か言わなければ。
そう思い、風奈が口を開こうとした瞬間、先に沙夜が先勝をとった。
「前から分かっていたわ。風奈が断ることを」
「え。じゃあ、どうして聞いたんですか？」
「ほんの少し期待があったのかも。もしかしたら、受け入れてくれるって。でも、期待してた通りで安心したわ」
申し訳ないことをしてしまったのかもしれない。
これから、沙夜はどうするのだろう？
風奈が断るとなると、次期生徒会長も国王も一体誰になるのか。
それが気になった。
「それで、沙夜はどうするんですか？　これからのこと」
「そうね、そのことだけれど、風奈しかいないわ」
「でも、私は」
「分かってる。まだ次期の王になるのに、戸惑っているのよね。吸血鬼の王になるのに、それが人間だということを」
「――――」
図星だ。
そう、そのことがなければ、もしかしたら風奈は受け入れたかもしれない。
不安な表情でいる風奈の隣に、沙夜は腰かけた。
「大丈夫。私はあなたの味方よ。だから、信じて」
「――はい」
沙夜が横に座ってくれたおかげか、強い味方がいるという実感で、心から安心することができた。

「とりあえず、今は王のことは考えなくてもいいわ。まだその時じゃないみたいだし、まず、この世界のことを知ってからでも構わない」
「分かりました」
三分と短い時間、風奈は沙夜の隣で一緒に過ごした。
四分後、月都が来たので、その時間は崩されてしまった。
慌てて沙夜は風奈から離れ、元の場所に戻る姿はまるで、特別な人にしか見せない行動かのようにも見えた。

第7話「ギルギア国」

三時間目の授業が始まり、風奈のクラス全員は外へと集まった。
何をするのかというと、これから、買い物をするらしい。
どうして授業で買い物をしないといけないのか。
そんな疑問が浮かんだが、風奈は目的の場所に集まり、先生の話を聞いた。
「よーし、これから隣の国、ギルギアまで買い物に行ってもらう。買う目的はみんなバラバラだから、もちろん一人行動だ。迷子にならないよう、気を付けて行くんだぞ」
ギルギア？
聞いたことない場所だ。
隣の国というものだから、当然、ここも吸血鬼がいるのだろう。
「よし、それぞれ買う目的のリストを貰ったな。では、出発だ」
並んでいる前の人からリストを貰い、それぞれ、動き始めた。
風奈が買う予定のものは、どうやら野菜のトマトらしい。
これは吸血鬼としてかかせないものであろう。
それを風奈が買うというのは、何か、変な気分でもあった。
それぞれの生徒たちは離れていき、風奈一人だけとなった。
でも、みんなの後を付いていったおかげで、無事ギルギア国までに着くことができたので、ここまではよしとしよう。
「えっと、トマトはどこにあるんだろう？」
とりあえず、元いた世界でいう商店街みたいな通りに入ったものの、トマトは見つからない。
「銀行らしき建物に、工具店みたいな建物」
次々と通り過ぎていく建物を言っていき、目的の野菜を売ってるお店へを探す。
このまま知らない国で見つかるのだろうか。
そんな不安が風奈を襲った。

風奈が野菜店を探しているその頃、沙夜は赤神国で生徒会室にいた。
側近である、月都も一緒だ。
コツコツと書類にはんこうを押し、軽く息をついた。
「ふぅ。結構王っていうのも疲れるものね」
「何を言ってるんですか、会長。この仕事を選んだのは会長なんですから、きちんと責任を持ってください」
横で、月都が沙夜を支えた。
「分かってるわよ。それで、風奈のほうはどう？　最近、変わったこととかない？」
「いえ、特には。あ、そういえば――」
言ってもいいような、でも、言っては悪いような言葉が月都を思い出させた。
「何？」
「――今日、ギルギア国に行きました」
その言葉を聞いて、沙夜の表情が変わった。

未だ野菜店が見つからない風奈は、途方にくれていた。
三十分も歩いて見つからない。
知らない国なので、体力も限界がきていた。
歩いている途中、噴水がある広場に出たので、そこの近くにあったベンチに座ることにした。
「ふぅ、野菜店、どこにあるんだろう。疲れた」
ボッーと目の前にある噴水を見つめる。
とても綺麗な水が溢れ出し、近くには鳩らしき鳥がトボトボと歩いている。
こういった普通の風景を見るのは久しぶりだ。
赤神国では、噴水があっても、水の色は赤。

そして、その周りには鳥もいなく、殺風景なものだった。
でも、ここでは元いた世界を思い出させる。
しばらく、公園で休んでいると、黒い車が公園の近くに止まった。
無駄に長い車で、お金持ちが乗りそうな外見だ。
運転手席から年老いたおじいさんが出てきて、姿勢を崩さず、車の左側へと向かう。
どうやら、車のドアを開けるために、向かったみたいだ。
そっと様子を窺っていると、そこから、黒い長髪をした女の人が出てきた。
背は高く、とてつもなく美しい。
学校の制服を着ているのだから、ギルギア国の生徒なのだろう。
手にはカバンを持ち、公園の隣にある高級な校舎へと入って行った。
最後まで見届けていると、遠くで、声が聞こえた。
「あ、いた。風奈、目的の物は見つかった？」
少し離れた場所で、哀歌に言われた。
「ううん、まだ」
そうだ、と思い出したかのように、風奈は目的のトマトを哀歌と一緒に探すことに決めた。

「羽香様、もうご存知かと思いますが、赤神国で新しい王が決まりました」
男子はその人物に手を胸に当て、軽くおじぎをし、伝えた。
「ああ、分かっている。確か、冬月風奈といったな」
「はい、まだ来たばかりで、自分がいる国もこの国のことも分からないようです」
「そうか、なら、まだお前が入れる余地はあるということだな」
ニヤリと羽香は笑みをつくった。
「でも、私の力ではあの沙夜に勝てません。いくらしたって、私が生徒会長と国王の座に座ることなど」

「ふっ、そんなことなど容易いこと。氷、お前にこれができるか？」
そういって、作戦のような紙を見せた。

夕方。
どうにかトマトを見つけ出し、赤神国に着いた風奈は最初の時の集合場所に到着していた。
手には紙袋に入ったトマトがたくさんある。
きっと大事に育ててこられたのだろう。
真っ赤なトマトは身が引き締まって、傷一つない。
おいしそうだな、と思いながら手元にあるトマトを見つめていると、目の前で先生がみんなに話しかけた。
「よし、今日の授業はここまで。みんな、目的の物は見つかったかな。それぞれの物は決められた場所に置くように。以上」
それだけ言って、先生は校舎の中に入っていった。
風奈もトマトを置くために、校舎の中にある食堂へと向かった。

第8話「正体の行方」（前編）

翌日、ざわざわと廊下で騒がしい声が聞こえてくる。
風奈はちょうど学校に着いたところで、今の状況を理解していない。
下駄箱で外履きから上履きに履き替えている間、その声は風奈の耳に届いていた。
「おいこれ見てみろよ。『冬月風奈、人間であることが発覚。証拠写真もバッチリ』って書かれてるぜ。人間ってまじかよ」
「何これ、人間？　人間って確か昔に滅んだんじゃないの？」
「もし、人間がいるとしたら、実験施設行きだよ？　この子、どうするんだろう？」
ぞろぞろと生徒たちが集まり、壁に貼られてあるポスターを見て、騒いでいる。
これは大変なことになった。
どうして風奈が人間だと噂されているのか。
一体誰がこんなことをしたのか。
風奈が人間だということは沙夜と月都だけなのに。
とりあえず、この場を離れるため、風奈は急いで教室へと向かった。

教室の前（廊下）に着き、軽く走ってきて、乱れた息を整えた。
きっと、教室でもあの話題で持ちきりだろう。
これからどうすればいいのか。
このまま教室へ行くのもありだが、きっと、みんなの視線が痛いだろう。
みんなに注目され、質問攻め、もしくは風奈の傍から離れていくのが落ちのはずだ。
じゃあ、寮に帰るか。
いや、それも、できることならしたくない。

帰っても、ずっとこの話題が続くだろうし、休まるどころか悪化するかもしれない。
じゃあ、どうすれば？
そう考えていると、肩を後ろから叩かれた。
「ひゃっ」
「あ、悪い。驚かせたな」
「つ、月都さん」
後ろにいたのは、月都であった。
まただるそうにしている。
「あの、どうしたんですか？」
「それはこっちのセリフだ。お前、この騒ぎでまずいことになってるのは知ってるな？」
「はい」
「よし、じゃあ付いてこい。これからのことを話す」
月都は歩き始めた。
その後を、風奈が追いかけ、二人は階段を上っていった。

生徒会室。
風奈はそこにいた。
真向かいには沙夜がいて、この前みたいな状況で座っている。
でも、月都がいるから、この前みたいではない。
テーブルには前と一緒の紅茶で、その少し先にはお菓子が置かれている。
沙夜は紅茶に手をつけず、話し始めた。
「これは大変なことになったわね」
「はい」
「どうしてこうなったのか、風奈は知ってる？」
「いえ、知らないです。朝、学校に着いたらこんなことに」
軽く沙夜は溜息を付き、無言の状態が続く。

そして、
「風奈が人間だということは、私と月都しか知っていないはず。バレることはありえないわ」
でも、こうして他者に知られている。
バレてしまったのだ。
「もしかして、私が何かしたとか？　バレるような何かを」
「何か自覚があるの？」
「いえ、ないです――」
「なら、風奈じゃない。となると、考えられるのは、部外のものね。月都、さっきのポスターを見せてくれる」
「あぁ、あいよ」
月都は廊下に貼られてあったのと同じポスターを、沙夜に渡した。
じっくりとそのポスターを沙夜は見る。
「う～ん、これによると、証拠があるらしいわね。気になるわ」
「証拠？　でも、どんな」
「それは分からない。これは調べるしかなさそうね。月都、あとは頼んだわよ」
「はいはい、分かりました」
月都は生徒会室を出て行ってしまった。
一体何をするというのか。
わけが分からないまま、風奈は生徒会室に残された。
「それで、風奈のこれからのことだけど」
「はい」
「あなた、これから一週間この生徒会室で過ごしなさい」
「どういうことですか？」
生徒会室で過ごす？
そんなことが許されるのだろうか。
でも、生徒会室に残ってしまったら、授業が受けられなくなってしまう。
「騒ぎが収まるまでの間、生徒会室で過ごすの。先生には病気で入

院したと言っておくから、安心して」
「いや、でも、授業のほうは――」
「確か、哀歌っていう友達がいたのよね。その子に後で見せてもらえばいいわ」
そうだった。
授業は哀歌に頼んで、後で見せてもらえばいいのか。
風奈は友達の存在まで混乱で忘れてしまっていた。
「分かりました」
「風奈は寮にも戻れなくなるから、お風呂は温水プールにあるシャワーを使って。あそこはお湯も出るはずだったから」
「はい――あのっ！」
大きい声で沙夜に聞いた。
沙夜は驚いたようで、目を大きく見開いた、。
「何？」
「もしかしたらですけど、こんなことをした犯人はこの学校の生徒ってこともありえるんですか？」
「ええ、ありえるわ。学校の部外者ってことも考えられるけど、恐らくこの学校の生徒に間違いない」
「どうして？」
「証拠写真があるからよ。ポスターに書いてあったでしょ？　証拠写真があるって。それはつまり、学校以外の部外者はありえないってことになる。もし、部外者がいたのなら、生徒が気づいて報告するはず。でも、それはなかった。となると、怪しまれずに写真を取れるのは、この学校の生徒ってことになるの」
真面目に沙夜は話した。
「なるほど」
風奈は不安な表情を見せた。
「大丈夫よ、この噂絶対に消してみせるから」
沙夜の微笑みに、風奈は安心することができた。
心から信頼できる、その微笑みに。

第9話「正体の行方」（後編）

窓から差し込む明るい光に照らされて、閉じていた瞼を開けた。
夢は見なかったと思うが、まだぼんやりしている。
あれから、これからのことや、犯人のことなど頭がパンクするほど考えていたから無理もないだろう。
まだ寝るのが物足りない感じだ。
軽く欠伸をし、上半身を起こす。
ここは生徒会室で、今までソファの上で寝ていた。
時刻は六時半過ぎ。
起きるにはまだ早い時間だが、目が覚めてしまったので仕方ない。
このまま起きていることにした。
――スー、スー――。
どこからか寝息が聞こえてきた。
「あ」
生徒会長の机を見ると、そこには沙夜が机に突っ伏して寝ていた。
どうも見事に綺麗な寝姿で、可愛らしい印象を受ける。
恐らく、風奈が寝た後も必死で犯人やら、騒ぎを止めるための対策を練っていたのだろう。
ほんと、思いやりのあるいい子だ。
風奈は自分が使っていた毛布を取り、沙夜の肩にかけてあげた。
今の時期、朝方は寒いので、風邪でも引いたら大変だ。
そっとかけてあげると、起きそうな反応を起こしたが、結局起きずスヤスヤと眠り続けた。

暗い部屋の中、一人の少女がいた。
明かりも付けないこの部屋で、少女は座り込み、一冊の本に集中している。

ぼそぼそと独り言を言い、ハサミで、本をボロボロに傷つけていく。
「うふふふふっ、さぁ、早くいなくなりなさいよ。この恨み、絶対に許さないんだから。さぁ、さぁ、さぁ！！」
本にペンで名前を書いては、ハサミで傷つけ、至福を味わっていく。
彼女にとって、抱えている悪はとても興奮を覚えるほどの嬉しさらしい。
彼女の表情はとても嬉しそうで、不気味な笑みを作っていた。

「会長、調査したところ、学校のいたるところに多数のカメラが貼り付けられていました」
午前9時過ぎ。
生徒会室に月都が報告しにやって来た。
「やっぱりね。自分で動くより、カメラを貼り付け対象人物の行動を捉えていく。こっちのほうが有利だと思っていたのだけど、どうやら正解だったらしいわね」
沙夜の考えはこうだ。
犯人が自ら対象人物をカメラで撮っていくより、学校中にカメラをセットして撮っていけば怪しまれずにすむ。
このほうが犯人にとって有利ということになる。
まさにこれが行われていたのだ。
「それで、カメラのほうは？」
「もちろん、全て処分しました」
「ありがとう。風奈」
「はい」
「犯人を見つけるにはまだ難しいけれど、この騒ぎを止めるくらいなら何とかできるわ。協力してくれるわよね？」
騒ぎを止められるなら、何でもする。
風奈はそう思っていた。
「もちろんです」

その後、沙夜は笑みを作った。

放送室。
放送委員が放送をする準備を始めていた。
二人いて、一人はマイクの手前に座っている。
全校舎に流れるボタンを押し、生徒は読み上げた。
『全校生徒の皆さん、こんにちは。今、学校中である噂が流れているのをご存知でしょうか？　知らない人もいるかと思いますが、その噂について沙夜様からお話があるようです。至急、クラスごとに体育館へ集まってください。繰り返します――』
その情報は全校舎に流れ、生徒全員の耳に届いた。
また、届いて欲しくない者の耳にも届いたが。
バンバンバンッ。
誰かが生徒会室の扉を強く叩いた。
何事かと思い、月都は扉を開ける。
すると、そこにいたのは、氷の妹だった。
「冬月風奈！」
名前を呼ばれたので、風奈は出た。
「な、何ですか？」
「出たわね。前は生徒会長とか国王に選ばれて、今度は、あなたが人間だって大騒ぎになってる。ほんと、あなたは騒ぎを起こすのが上手ね！　そこまでして、前まで平和だった学校を支配したいの！」
「え、支配って、そんな」
「いい！　私は絶対、あなたが国王とか認めないから！　絶対によ」
そう言い残し、氷の妹は去っていった。
まるで、嵐のように去っていき、傍にいた沙夜や月都もポカーンとしていた。
一体何だったんだろう。
訳が分からないまま、二人は体育館へと向かった。

先程の嵐も過ぎ、全校生徒が体育館へ集まった頃、沙夜と風奈は体育館の裏側にいた。
体育館の裏側にいても、生徒たちのざわつきは微かに聞こえてくる。
「これで全員集まったのね」
「はい、全員揃いました」
沙夜は月都に確認を取った。
「よし、風奈、行くわよ」
「分かりました」
沙夜と風奈は足を進め、体育館の中に入った。
体育館の裏口から舞台裏まで行き、そこで足を止める。
『全校生徒の皆さん、落ち着いてください。間もなく、沙夜様からお話があります』
司会が生徒全員を静めようとする。
それでも、生徒はざわつき、一向に静かにならない。
「一体何の話だ？」
「あの噂、本当なのかしら」
「人間っておいしいのかな？」
増々、生徒たちのお喋りは増えていき、司会の人は困った表情をする。
「風奈、全て私に任せなさい。そして、何をするにも逃げないで。約束してくれる？」
指切りげんまんをするため、沙夜は小指だけを立て、その形を作った。
「約束します」
風奈も小指を立て、沙夜の小指と重ね合わせた。
約束が終わると、沙夜は舞台へと出た。
その瞬間、ワーッと騒がしくなるが、沙夜が手を軽くあげただけでみんな静まり返った。
「皆さん、この度はここに集まっていただきありがとうございます。実はお話があって、こちらへ集合させました。皆さんも知ってるか

と思いますが、今、学校中はある噂で持ちきりになっています。その噂は冬月風奈が人間であること。一体誰が広めたのか知りませんが、今日ここで風奈が人間ではないことを証明いたします」
沙夜は舞台裏にいる風奈に、こちらへ来るようサインを送った。
そのサインに気が付き、風奈は沙夜の元へ駆け寄る。
「これからその証拠を見せます。風奈」
「え？」
沙夜は風奈の腰に手を回し、抱きしめる形になった。
細い指が手が、風奈の腰に巻かれ、ギュっと力がこめられる。
足と足が太ももが体全部が、沙夜に密着する。
顔も近づき、甘い香りが漂う。
「あ、あの――」
「いい？　これからあなたにキスをするから、そのまま逃げずにいるのよ？」
「えっ、あの、ちょっと」
いくら拒もうとしても、無理だ。
そもそもどうしてキスをしないといけないのか。
それは沙夜にしか分からない。
とにかく、そのまま受け止めるしかない。
そう風奈は思った。
すると、風奈はあることに気が付いた。
よく見ると沙夜の唇に何かが貼ってあるのだ。
これはセロハンテープだ。
さっきまで貼ってなかったのに、いつ貼ったのだろう。
テープを気にしている間、沙夜と風奈は抱きしめ合い、口と口が近づいていく。
その光景を、生徒たちは唾を飲みこみ、静かに見守っていた。
そして、二人の唇は重なり合い、全校生徒の前でキスをした。
その瞬間、生徒たちはワーーーッと歓声が沸き起こった。
「ハァハァ――」

まだ沙夜の顔付近に風奈の顔がある。
微かに吐息が聞こえ、何故かドキドキしていた。
「風奈、ありがとう」
「い、いえ、そんな――」
お互い、離れ、二人とも顔を真っ赤にする。
沙夜はふぅと軽く息を整え、さっきの感じに戻った。
「皆さん、私は今もう一つある禁忌をおかしました。それは人間とキスをしてはいけないということ。もし、人間とキスをしたら自分を見失い人間の血がなくなるまで吸い続けるというお話があります。でも、私はその状態にならなかった。これで、彼女が人間ではないということが証明されます」
「確かにそうだよな」
「沙夜さまは、血を吸わなかった」
「もしかして、本当に吸血鬼なの？」
だんだんと生徒たちは風奈が人間じゃないと理解し始めた。
その光景を見て、二人は安心をする。
「でも、吸血鬼同士でしても、症状が現れるはずじゃ――」
ある一人の生徒が、声に出した。
「ここで、みんなに話さないといけないわね。昔から言い伝えられてきた禁忌は、全て嘘の情報よ」
「嘘って、どうしてそんな」
また、ある生徒が声をあげた。
「昔、ある吸血鬼の王がいたの。その王は人間の血を吸いまくり、絶滅させるまで吸い続けた。そう、彼は人間の血があまりにも美味しすぎて、依存し続けたのね。そこで、新たな王がこう言ったの『このままじゃいずれ人間は滅びる。滅ばないよう、吸血鬼たちに嘘の情報を与えて、人間に依存させないようにしよう』と」
生徒たちは真剣に話を聞いている。
「そこで出来たのが、二つの禁忌。一つは人間とキスをしたら自分を見失い混乱する。二つ目は吸血鬼同士でキスをすると、異常行動

が出ると。そのことを知った者たちはみんな信じ、誰もが首元付近まで顔を近づけなくなった。そして、世界は平和になったのはいいものの、先代の王は人間の血を吸いまくっていた。そう、自分を見失い人間が滅びるまで。彼の結果により、人間は滅び、先代の王を見て誰もが『禁忌を犯したから罰が当たったんだ』と言われ続けてきた」

「先代の王によりみんな禁忌を信じた。本当は嘘で、先代の王はただの依存しただけだというのに」

そんな話があったなんて、というような表情で、みんな驚いていた。全てが嘘、つまり、人間や吸血鬼同士キスをしてもいいということになる。

それを知り、生徒たちはざわつき始めた。

そう、キスができる――と。

「だから、今までの禁忌は全て嘘になるの。ごめんなさい、大事なことを隠していて」

沙夜は謝った。

本当なら許してもらえないであろう。

今まで、恋愛でお互いのキスという行事をやらせないようにしていたのだから。

だが、生徒たちの声は違った。

「いいんですよ、沙夜様。謝らないでください」

「そうだ、俺たちは気にしていないぞ」

暖かい声がいろんな所から聞こえてくる。

「みんな――ありがとう」

沙夜は暖かい気持ちでいっぱいだった。

この時、王とはいいものだなと実感した。

その後、風奈が人間じゃないこと、みんなに伝えられ、二人は疲れの姿を見せた。

生徒会室に戻り、沙夜と風奈はソファへと座る。
月都は紅茶をテーブルに出し「お疲れ様です」と言った。
「風奈、ご苦労様。これで噂は完全に消えたわ」
「本当にありがとうございます」
「別にいいのよ、お礼なんて。それより、いきなりキスをしてごめんなさい。嫌だったでしょ？」
キス、と言われ、風奈はさっきのことを思い出した。
ポンッと顔を真っ赤にして、
「いえ、そんなことは」
そのまま、顔を下に向けた。
「そう、よかった。あのキスはノーカウントにしていいから。ちゃんとテープでしたし」
「は、はい」
風奈はノーカウントと聞いて、ガッカリしたようなそうでもないような感じに襲われた。
この気持ちは何なのだろうか。
それを知るにはまだ先になるだろう。

第１０話「ヴァンパイア血めぐり競争」（前編）

バンッ、パパン。
先日の騒ぎに変わり、大空に向かって、空砲が撃たれた。
第百二十五回赤神学院血めぐり祭が開催されたのだ。
血めぐり祭とは、いわゆる、体育祭みたいなものである。だが『血めぐり』ということだから、当然、体育祭と違うのだろう。
そう風奈は思っていた。
『さぁさぁ、始まりました、我が校有名な血めぐり祭。今年はどんな展開が待っているのでしょうか。今回は新たな人物も加わり、どんなことになるか見ものです。また、勝敗の決め方は、相手の牙の赤さで変わるので、全牙、真っ赤に染まっていたらその者の勝ちとします。皆さん、頑張って吸ってください』
壮大に司会者はそう言った。
新たな人物となると、風奈しかいない。
そんなにも有名なのかと少しこれからのことで憂鬱になりかけていると、体育着姿である沙夜が話しかけてくれた。
「大丈夫、あなた通りにすればいいのよ。何も、みんなの期待通りにしなくてもいいの」
「そうなんですけど、どうも、みんなに期待されてるようで頑張らないとって思っちゃうんです」
軽く溜息をついた。
「無理もないわ、何たって私の後継者なんだから。でも、風奈は風奈通りにすればいいの。さぁ、ハチマキ巻いて行くわよ」
そういって、赤いハチマキを渡された。
どうやら沙夜と同じ色らしい、と思っていたが、違うようだ。沙夜は青色、そして、風奈は赤色であった。
そうなると、お互い敵同士ということになる。
これは風奈と沙夜が戦うことになるということだ。

ちなみに、月都は沙夜と同じ青チームである。
沙夜に渡された赤いハチマキを額にかけながら、赤チームの集合場所へと移動する。
チーム色は赤、青、黄となっており、これまた人間の時にいた体育祭と同じ感じであった。
だが、渡されたしおりを見たところ、競技名がどれも怪しいので、風奈は不安は表情を浮かべた。

学長、生徒会長の話も終わり、準備運動も終了したところで、それぞれのチームは観覧席へと移動した。
ここでは、出場する選手以外の生徒が、競技を見られる場所である。
ここも体育祭と同じようだが、違いがあった。
それは売り物が売られていることだった。何やら、係の生徒が飲み物を販売しているらしい。
観覧席で自分の席に座っていると、大きな声で『レッドドリンクいかがですかー？　今なら安いですよー』と声をかけているのだ。
レッドドリンク、聞いただけで、血を思い浮かべた。
午前九時過ぎ。
まだ競技は始まらないので、風奈はまたしおりを読み始めた。さっきは競技名をさらっと長い読みで見たので、今回はじっくり読むことにした。
一番最初の学長、生徒会長の話と準備運動は終わったので、その後の項目を読んでみると『血引き』というのに目を止めた。
血引きとは何だろうか？
そのまま読めば、血を引くということだが、もしかして誰かの血を全身から引くのか。
そう怖い想像をしてしまった。
一体どんな競技なんだろう。
かれこれ考えていると、後ろから肩を軽く叩かれた。

「ひゃっ」
「何、驚くことでもないじゃない」
そこにいたのは、氷の妹だった。
同じ指定の体育着を着ていて、ハチマキの色は同じ赤色であった。
「あ、えっと、氷さんの妹さん？」
「そうよ、何か文句でも？」
「いや、文句とかじゃなくて。その、何の用ですか？」
「なに、何か用がないと来ちゃダメっていうの」
「そういうわけじゃなくて」
「だったら、何？　わざわざ私が来てあげたんだから、感謝しなさい」
何に感謝するべきなのだろうか。
何も思いつかない。
「は、はい――」
「んっ！　つまり、同じチームだから仲良くしましょうって言いに来たのよ！　これで分かった！」
なるほど、そういうことか。
だったら、理解できる。
「それなら分かりました」
「ったく、いちいち面倒な子ね。でも、同じチームだからといって、あまり仲良くはしないわよ。分かったわね？」
「分かりました」
「よし、ならよろしい。で、名前は、確か風奈とか言ったわね」
「はい、冬月風奈といいます」
「そっ、私は閃光絆。よろしくね」
閃光絆か。
いい友達になれそうだ。
「それで、あんたは何を見ていたわけ？」
あんた。
名前で呼ばれるにはまだ遠そうだ。

「しおりを見ていたんです。この血引きって何かなって思って」
「血引き、そんなことも知らないの？」
「まぁ」
「ふーん、無理もないか。確か転校生で来たばっかりだったのよね」
「はい」
転校生でまだ何も知らないことが分かると、絆は顔を高くして偉そうな感じになった。
「じゃあ、全て教えてあげてもいいわよ」
「本当ですか？」
「ええ、正し、条件がある」
「条件？」
風奈は首をかしげた。
「次期国王と次期生徒会長の座を降りて、兄に譲ること。それができたら、全部教えてあげてもいいわ」
突然のことで、風奈は驚いた。
「そ、それは」
「何？　できないっていうの？」
本当なら譲ってもいいのだが、沙夜にその気はないだろう。
ここで譲ってしまったら、後々面倒なことになり、沙夜から何を言われるか分からない。
ここは一先ず保留ということで。
「それはできないです。他だったらできるかもしれません」
何とかして断った。
「そう、あんたもその気はあるようね。じゃあ、これが最後。伝統種目である『ヴァンパイア血めぐり競争に負けなさい』
「ヴァンパイア血めぐり競争？」
「昔から伝統種目とされているヴァンパイア血めぐり競争。何をするのかというと、敵の血を吸い続けて相手が倒れたら負けってなる種目よ」
「つまり、我慢比べみたいなものですか？」

内容は異なるが、相手が倒れたら負けってことなので、これに当てはまるだろう。
「まぁ、そういうことになるわね。だから、選手は相手に吸われないように逃げ続けるの。簡単にいえば、鬼ごっこ＋我慢比べってことかしら」
「なるほど。それに私が負ければいいんですよね？」
「ええ、そういうことになるわね。あんたが、青チームから逃げずその相手に吸われ続ければいいってことよ」
それならできるかもしれないが、本当に受けていいのだろうか。
これで負けて、沙夜は何というか。
想像すらできなかった。
「分かりました。やってみます」
「ふふっ、いい子ね。ほら、しおりを貸しなさい。全て教えてあげるわ」
しおりを奪われ、絆からいろいろ種目の内容を教わった。
絆のせいで、こんなことになってしまった。
本当に負けられるのかな？
そんなことが浮かび、不安な一日が始まろうとしていた。

伝統行事であるヴァンパイア血めぐり競争。
それはしおりの種目名五行目にその名は記されていた。
今は四行目の種目が実施されている。
それは血引きで、どうやら綱引きらしい。
ただ一つだけ違うのは、綱に真っ赤ないペンキがかけられていて、ぬるぬるし上手く綱が退けない行事みたいだ。
「うぅ、何これヌルヌルして上手く綱が引けないよう～」
「あともうちょい、引くぞ～」
「負けてたまるもんか。おりゃ～」
グラウンドから血引きをしている生徒の声が聞こえてくる。

そんなにヌルヌルするものなのか。
心の中で頑張れと応援していると、声をかけられた。
「風奈」
「あ、沙夜。どうしたの？」
「次はヴァンパイア血めぐり競争でしょ。それで話合いに来たの」
立って話すのも悪いので、風奈は隣の席に座るよう譲った。
「そっか。沙夜は次の種目に出るんですよね？」
「ええ、風奈も出るでしょ？　それで、私は風奈の血を狙おうと思うんだけど、いいかしら？」
「えっ。あぁ、いいですよ。もちろん。私、牙もないから誰のも吸えないし、できることは吸われることとなので」
「なら、遠慮なく吸うことにするわね。でも、手加減しておくわ。あまり吸い過ぎて貧血を起こしたら大変だし」
「いえっ、大丈夫です。いっぱい吸ってください」
「そこまでいうなら、ありがたく吸わせてもらうわね。でも、いきなり開始で吸うのもつまらないから、きちんと逃げるのよ」
「もちろんです」
それから他愛もない話をして時間が過ぎていった。
そして、沙夜と風奈が出る種目。
ヴァンパイア血めぐり競争が始まろうとしていた。
『今年もやってきました、ヴァンパイア血めぐり競争。昨年は赤チームが勝ちましたが、今年はどのチームが勝つのか見ものですね。では、選手の皆さん校庭の真ん中に集まって、敵同士と対面してください』
司会に言われ、選手のみんなはぞろぞろ校庭の真ん中に集まり、対面した。
風奈の目の前にはもちろん沙夜がいる。
「風奈、空砲が撃たれたらどこへでも逃げなさい。それから十秒経ったら私たちが追いかけるから」
風奈はコクリと頷いた。

そして、五分後。
パンッ。
乾いた音が校庭に響き、ヴァンパイア血めぐり競争が始まった。
対面していた一列の生徒がそこら中に逃げ回る。
逃げていい範囲は学校の敷地内ならどこへでも可能だ。
もちろん、校舎の中でもＯＫ。
あらゆる所に、カメラが設置され、司会の人や審査員の人がモニターで監視してるからどこでも平気なのだ。
「十、九、八、七、六、五、四、三、二、一――よし」
数を数え、沙夜は風奈を追いかけた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7243w/

鬼殿さまの申し出！

2012年1月14日10時49分発行